

## 平成27年度 第2回伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会 議事録

日 時 平成27年 11月16日(月) 18:30~21:15  
場 所 三重県伊勢庁舎 401会議室  
出席委員 松本 金矢、魚住 明生、清水 清嗣、山北 佳宏  
宮崎 吉博、斎藤 陽二、前田 藤彦、中西 正典、片山 嘉人  
木村 元成、奥井 準次、本多 亮介、木下 元美、森田 豊人  
掛橋 靖、池田 拓司、柴山 昌弘、池田 久、舟戸 宏一(浜田元宏委員代理)  
欠席委員 亀谷 章、石野 雅彦、池之山 繁生  
(事務局) 教育政策課長 宮路 正弘、高校教育課長 長谷川 敦子  
教育政策課長補佐兼班長 辻 成尚、  
教育政策課 上村 和弘、伊藤 陽子

### 開会

#### ○事務局

定刻になりましたので、「平成27年度第2回伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会」を始めます。

まず、本日の配付資料について確認させていただきます。事項書が表紙の2カ所留めの資料が1部、「伊勢志摩地域高等学校活性化を考える会」の資料が1部、「地方は本当にだめになったのか」というタイトルの三重大学の西村先生からの資料が1部、計3部です。今回は資料の修正等の関係で、事前配付ができませんでした。お詫び申し上げます。

なお、本会議は公開で行っています。また、議事録を作成する関係から音声を録音させていただきますので、ご発言はマイクを通していただきますようご協力をお願いします。

それでは、事項書に沿って進めさせていただきます。まず、開催にあたり、県教育委員会事務局教育政策課長宮路正弘からご挨拶申し上げます。

### 1 挨拶

#### ○宮路教育政策課長

本日はお忙しい中、また、夜分お疲れのところ、第2回伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会にご出席いただき、ありがとうございます。

前回の協議会では、小中学校の保護者等を対象に、今後の中学校卒業者の減少など、県立高校を取り巻く状況についての説明会を市町ごとに開催して意見をお聞きしていくことや、小中学生やその保護者を対象に、地域の高校が合同で説明会を開催することなどの方向性についてご確認をいただきました。

また、10月19日に、「第1回鳥羽・志摩・度会地域検討ワーキング会議」を開催し、鳥羽・志摩・度会地域の高校の志願者増加に向けた方策について、地域との連携や学校のPR等の観

点から協議いただきました。本日は、まずこれらのことについて報告させていただくとともに、志摩市で既に開催しました小中学校の保護者等への説明会等についても、意見の概要を含め報告させていただきますので、ご意見をいただければと思っています。

次に、今年度の当協議会の取組としまして、ゲストスピーカーを招へいし、より広い視点で協議を進めていくことにつきましても、前回の協議会で確認をいただきました。これに基づき、本日は地方創生に向けた取組の最前線でご活躍されている三重大学副学長の西村訓弘先生にゲストスピーカーとしてお越しいただきました。これからの地域と高校の関係などについてご講演をいただき、その後、皆様と意見交換していただければと思っています。

また、既に実施しました保護者等への説明会における意見につきましては、協議の中でも、それを踏まえた「今後の県立高校のあり方について」ご意見をいただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

本日も限られた時間ではございますが、様々な角度からご意見をいただき、有意義な会となるようお願い申し上げます、開会にあたっての挨拶とさせていただきます。

## ○事務局

配付資料の1ページ、2ページをご覧ください。本会議の委員名簿及び座席表を掲載しています。本日は、亀谷委員、石野委員、池田委員がご都合により欠席とお伺いしています。また、神島中学校の浜田委員の代理で磯部中学校の舟戸委員に出席いただいています。

なお、度会町教育委員会教育長に中西様のご就任され、今回より委員をお務めいただきますので、一言、ご挨拶をお願いします。

## ○中西委員

前任の藤田教育長が副町長となったため、その後を受けまして、9月20日付で教育長を拝命いたしました中西です。よろしく申し上げます。

## ○事務局

それでは、松本会長からご挨拶いただき、その後の進行をお願いします。

## ○松本会長

この夏休みに、「東北交流ボランティア」を実施し、私も引率者として参加しました。参加した生徒たちは事前学習から熱心に取り組み、帰ってきてからは、自分の学校内や地域において、見聞きしたことを伝える活動も始めています。

それから、本日は、三重大学の西村副学長から、地方創生をテーマにお話をいただきます。教育に深くかかわっている方々も視点を変えて、近い将来の子どもたちの地域における就職の方向性について考えるよいきっかけになると期待しています。スムーズな進行ができますよう皆様のご協力をよろしくお願いします。

それでは、事項書に従って進めます。事項書2報告事項(1)前回の協議会における主な意見と、(2)鳥羽・志摩・度会地域検討ワーキング会議の報告について事務局から一括して説明

願います。

- 2 報告事項 (1) 前回の協議における主な意見
- (2) 第1回鳥羽・志摩・度会地域検討ワーキング会議における主な意見

### ○事務局

報告事項の(1)と(2)について説明いたします。3ページの資料1をご覧ください。前回の会議は、7月13日に開催し、今年度の取組として、(1)にあるように、この地域の中学校卒業生数の今後の減少等を小中学校の保護者に説明して、意見を聞く説明会を実施していくことを説明しました。前回の協議会でいただいたご意見を4つに整理してあります。1つ目に、説明会のタイトルの上には県立高校を取り巻く状況についての説明会という仮のタイトルをつけてあるが、それでは内容が伝わりにくいため、説明会の目的を明確に示すことが必要であるとのご意見。2つ目に、県教委が適正規模・適正配置についての一定の方向性を示すことがないようしてもらいたいというご意見。3つ目に、中学校卒業生数の予測等の状況を伝えるだけでなく、各高校の特色や活性化の取組についても合わせて伝えるような機会としてはどうかというご意見。4つ目に、保護者だけではなく、一般の地域住民にも参加を呼びかけるとよいというご意見がありました。

(2)の中学校1、2年生や小学生とその保護者を対象に、地域の高校が合同で学校説明会を実施することも提案させていただきましたが、これについては、後ほど報告事項(4)で詳しく説明させていただきます。

第1回の後半は、中学校卒業生数の減少のデータ等をお示しした後、フリートークという形で活性化と適正規模・適正配置についてご意見をいただきました。それらを(3)と(4)にそれぞれまとめました。

まず、小規模校の活性化に向けた取組です。1つ目には、地元の高校が存続するためには、いかに地域と連動していくかが大切なポイントになるとのご意見。2つ目に、地方創生とリンクした県立高校のあり方を考えることにより、地域を大切に作る若者を生み出す教育に努めたいというご意見。3つ目に、全国的には小規模化している学校でも進学コースを設けたり、ICT機器の活用によるサテライト教育につなげたりしていくなどの様々な活性化の取組がある。地域のニーズを酌み取りながら考える必要があるというご意見。4つ目に、生徒たちの満足度が大切である。小規模の高校であっても活性化に取り組んでおり、生徒の満足度の向上につながっていくのであれば、考慮する必要があるとのご意見がありました。

一方、(4)の適正規模・適正配置については、1つ目に、なかなか具体的な協議につながっているとは言えないというご意見。2つ目に、4ページの最初のところで、平成30年度以降の急激な生徒減少を踏まえると、少なくとも来年度中ぐらいには協議会としてまとめる必要があるのではないかというご意見。3つ目に、伊勢市の高校が維持できているのは伊勢市周辺から生徒の流入があるからであって、地域全体の問題として考えるべきことであるというご意見。4つ目に、この協議会は要望の機会とも捉えられるので、地域の保護者に説明会への参加を積極的に呼びかけるなど主体的に取り組む必要があるというご意見などがありました。

5ページ、6ページは、10月19日に開催された第1回鳥羽・志摩・度会地域検討ワーキング会議のまとめです。(1)にあるように、鳥羽・志摩・度会地域の県立高校の志願者の増加に向けた方策について協議をしました。1つ目に、各市町が地域の県立高校の存続を望むなら、財政的支援や人的支援をすべきだし、各高校もそれに応えて地域との連携を更に進めるべきであるというご意見。2つ目に、前期選抜の募集枠を拡大したり、1学年2学級の高校を単独校で認めたりしてほしいというご意見。3つ目に、地域の子どもが地域で夢を追求できる学びが用意される必要である。4つ目に、地域と密着した取組がもっと進学に結びつくようになれば、地元からその地域の高校へ進学する生徒の増加に効果があるというご意見。5つ目に、地域の高校は小中学校との連携を進めることで、地元の高校生が地元の小中学生によいキャリアモデルになることが必要であるというご意見。6つ目に、この地域の生徒が地元の高校へ進学するのをより増やすことがとても大切な視点であるというご意見。7つ目に、学校は地方創生の基盤である。子どもが中心であるので、子どものニーズを把握しながら取組を進めたいというご意見。あとの3つは、鳥羽高校、志摩高校についての個別のご意見ですので、省略させていただきます。

(2)として、伊勢志摩地域高等学校活性化にかかる説明会において、保護者への説明をする際の資料(案)を見ていただき、ご意見等をいただきました。これにつきましては、本日の協議のところの(1)の②で、ここにある意見も踏まえて修正したものを改めて見ていただこうと思いますので、省略させていただきますが、6ページの最初の「○」にあるように、このワーキング会議でも地域全体に参加を呼びかけて広く意見を聞くべきであるというご意見でした。

以上、報告です。

## ○松本会長

前回の会議の内容のまとめを説明いただきました。改めてこの伊勢志摩の全体を考えて協議していく必要性がわかってもらえるかと思います。ただいまの説明について、ご意見・ご質問等はありませんか。この後の協議においても関連しますので、その中でもご意見をいただければと思います。

それでは、続きまして報告事項の(3)東北交流ボランティアについて、事務局から、活動の報告を願います。

## (3) 東北交流ボランティア活動報告

## ○事務局

それでは、地域防災プロジェクト「東北交流ボランティア」についてご説明します。

資料3が報告書の形になっておりますが、本日は前の画面をご覧いただきながら聞いていただければと思います。

この企画は、このワーキング会議から発案いただき、鳥羽・志摩・度会地域の県立高校と伊勢志摩地域全体の中学生に参加を呼びかけました。その結果、中学生20名、高校生22名の

応募があり、バスの定員の関係で、最終的には中高生合計34名に、大学生のリーダー6名と引率教員9名の計49名で実施しました。

活動を充実したものとするために、出発前には事前学習会を行いました。また、事後学習会を行い、参加した生徒全員で、今から報告させていただくスライドを作成しました。

まず、現地に着くまでの長い道なりをご紹介します。移動だけで丸一日かかりました。8月4日の朝7時、鶴方駅を出ました。これは、三重県庁で出発式前の様子です。鈴木知事から激励の言葉をいただきバスに乗りました。行きのバスの中では、津波の被害の映像をまとめたもの、それから、被災地の子どもたちの様子をまとめたものなど震災関係の映像を5時間ぐらい見て、事前に背景知識を活性化しました。

石巻に着いたのは、夜の10時でした。まず、スーパー銭湯に寄り汗を流してから仮設住宅に移動しました。真夜中の矢本運動公園仮設住宅集会所に到着し、男女に分かれて集会所に入りました。これが仮設住宅の集会所の様子です。自分たちで寝袋を用意して、座布団をクッション代わりに敷いて寝袋で宿泊体験を行いました。

2日目です。お世話になった矢本運動公園仮設住宅自治会長の小野さんに、生徒代表が挨拶をしているところです。朝に、自分で米を炊く準備をしています。これはポリ袋炊飯といい、災害時に少人数で米を炊く場合に、洗い物を出さずに効率的にご飯が炊ける方法です。まず、ポリ袋に自分の名前を書いて用意し、それにお米を入れ、水を入れて空気を入れた状態でしっかり口を縛ります。これを鍋で茹でると、約40分でご飯が炊き上がります。洗い物が出ないので被災時にはよい方法です。これにレトルトのカレーをかけて食べました。

炊きあがるまでの時間を利用して、メッセージカードを準備しました。これは参加する生徒が、事前に自分の友人や家族に1人10枚ほど書いてもらい持ち寄ったものです。これからの戸別訪問に備えて、それを整理しました。

ご飯が炊きあがりました。カレーとハヤシを選んで食べている様子です。食後に集会所の方とラジオ体操に参加しました。体操が済んだら流しそうめんの準備です。この竹は三重県から持ち込みました。東北では、気候の影響で、大きい竹が手に入らないらしく、流しそうめんをしても全部横にそうめんがこぼれてしまうということで、三重県から大きい竹を持ち込みました。竹を割り節を取って、スムーズにそうめんが流れるようにしています。

竹の準備ができましたら6つの班に分かれ、全部で300戸以上の仮設住宅を、メッセージカードを配付しながら訪問しました。目的は、この流しそうめん大会へのお誘いと、お年寄りの一人暮らしの見守りです。これが訪問の様子です。仮設住宅は長屋のように建っていますが、壁が薄くアスファルトが多いため、室内はとても暑いです。中にはポストに投函不要の張り紙がしてあり、引っ越して空室になっているところも結構ありました。この写真は、あるグループが、ある仮設住宅の方のお宅にお邪魔させてもらった際の様子です。仮設住宅の中も詳しく見せてもらったり、被災時のお話も詳しくうかがったりしたようです。ご覧のとおりかなり狭い状況のため、このように洗剤なども床に置かざるを得ない状況です。これはお風呂場ですが、物置の状態にせざるを得なくて、お風呂に入るときは、これを全部移動させて利用することでした。これが被災時のご自宅の写真です。ご本人は2階にいたので助かったのですが、1階にみえたご主人は津波で亡くなったという話も伺いました。

これは、流しそうめん大会の様子です。たくさんの子どもが笑顔で流しそうめんを食べてくれました。ボランティアの生徒たちも一緒に食べています。そうめんを茹でるのは自治会の方々に手伝っていただきました。そうめんだけでなく、子どもたちが喜ぶような風船つりや輪投げなど、縁日のような企画も行いました。流しそうめんが終わり、全員で記念写真を撮った様子です。

終了後は、バスで、壊滅的被害を受けた野蒜地区を視察しました。語り部の方に説明を聞いている様子です。これがJR野蒜駅です。そのまま今でも残されています。

その後は、奥松島の民宿に移動しました。夕食後は民宿のお母さんに、その民宿のある月浜地区の津波被害についてお話を聞かせていただきました。

次に、3日目の様子を報告します。3日目午前中は、被災地の視察を行いました。これは大曲浜の慰霊碑の写真です。黒い板には、ここに津波で亡くなられた300名以上の方のお名前が刻まれています。この観音様の頭の高さを、この場所を襲った津波の高さに合わせてあり、震災の記録碑にもなっているということでした。すでに、ほとんどの家は取り壊されて平地になっており、そこに雑草が生い茂っていますので、被災直後の様子をなかなかイメージすることはできませんでした。

これは女川町立病院の1階の柱の写真です。この病院は海拔16mの高台に建っており、大津波警報が出たときには、その地域一帯の人々は、この病院の駐車場に皆さん車で避難され、車の中で待機していたそうです。そこに想定を遙かに超える津波が襲ってきて、結局、駐車場に待機していた人たちは、全員津波で流されたということもお伺いしました。

これが、旧大川小学校の写真です。非常にモダンな建物ですてきな小学校だったことが想像できます。ここでは児童、教員70名以上が犠牲になりました。案内していただいた小野さんから犠牲者にまつわるお話も聞かせていただきました。生徒たちは流された場所に立つ慰霊碑にお線香をあげ、黙祷をして冥福を祈りました。

その後、大川小学校を後にしまして、石巻西高校を訪れました。この高校は震災時に、体育館が遺体安置所に、武道場が避難所になった学校です。当時の高校生が避難者のお世話をしたという体験を持つ学校です。その当時の生徒はもういませんが、経験は学校全体に引き継がれており、それを学びに行くために、この学校を交流先としてお願いしました。兵庫県から舞子高校の地域防災科を中心とした生徒も、訪問しており3県の中高生が合同でワークショップを行いました。18のグループを縦割りの混成でつくり、「災害で私たちができること」というテーマで意見を出し合いました。自分たちの考えを出し合い意見をまとめていきました。完成後はそれぞれのグループが発表を行い、質疑応答や先生たちによる講評をいただきました。これが記念写真の様子です。

その後、矢本運動公園仮設住宅に戻り、兵庫県の生徒と仮設住宅の方々とともにバーベキュー交流会を行いました。これは用意していた歌のプレゼントをしているところです。集会所で住民の方と一緒にちゃぶ台を囲んでお話をいろいろ聞かせていただきました。

最終日は、帰路の途中で福島県によりまして、福島県の福島第一原発からほぼ数kmということにある、南相馬市の小高地区を視察しました。訪問する直前まで、立ち入り禁止区域となっていたために、震災直後の様子がそのまま残っていました。人が誰もいないのを見ていただけ

と思いますが、映画のセットのような感じでした。除染が終わったところはこのように表示されています。これは小高駅という駅前の自転車小屋ですが、震災の朝から一切時が止まっています。まず復興を進めるために、幹線道路は真っ先に除染がされていて、車で通行することができますが、そこから左右に伸びる路地には、このようにバリケードがされており一切入れないという状況です。これらは、はぎ取った表面の土を入れたプレコンパックで、大量に置かれています。

帰りのバスの車中では、それぞれ参加者全員が、活動を振り返り、5分ずつコメントしました。4時間以上かかりましたが、生徒は熱心に話を聞いていました。

以上が、4日間にわたる東北交流ボランティアの様子です。実際に現地に行って見て交流させていただく中で、生徒たちも我々引率者も多くのことを体感することができたと思います。これからはこの経験を一人ひとり周りに伝えていくことが私たちの責任だと思います。

9月には、参加した生徒たちが、こういうスライドを使いまして、自分の学校の文化祭や学年集会等でそれぞれ説明を行っています。また、防災の日等に各地域で住民に発表することも企画されている市町もあるように聞いています。このように生徒たちが主体的に伝えていくことが大切な取組だと考えています。

以上で、報告を終わります。

### ○松本会長

3泊4日という長い活動をコンパクトにまとめて報告いただきました。これにつきまして、ご質問、ご意見をお願いします。今後、各地域への還流報告も実施される予定ということです。

### ○池田委員

この協議会で、このボランティア活動をやる趣旨があまり理解できません。内容自体は誠に結構で、やること自体はいいのだけれど、私たちがここで検討しなければいけないテーマとの結びつきが少し違う気がします。もっと三重県全体で広く呼びかけてやるべきことなのではないでしょうか。

### ○松本会長

確かに、各学校や個人でも取り組まれている内容でもあると思います。この協議会においては、地域と高校の関係を考えたときに、この地域全体に共通する問題として防災面があるということで、高校生が地域で学ぶことの意義を考えられる機会になるのではないかとということも含めて協議されたと思います。私も参加させていただきましたが、松島地方の風景が伊勢志摩地域と非常に似ており、子どもたちもそれを感じた様子で、被災の状況が他人事ではないように映ったのではないかと考えています。また今後、各地域における還流報告会等において、地元と参加した中学校や高校とのつながりも深まっていくのではないかと考えています。

そのほか、何かございませんか。

それでは、報告事項（4）高校による合同説明会について、事務局から説明願います。

## 2 報告事項 (4) 高校による合同説明会について

### ○事務局

報告事項(4)については、資料はありません。今年度の取組として中学校3年生だけではなく、小学生や中学校1、2年生まで幅広く生徒・保護者に来ていただいて、この地域の県立高校の学習内容や特色について、合同説明会をしたらどうかということで進めていこうという話をしています。合同説明会を通じて、地域の方々に各学校の学習内容や特色についてわかっただけなのではないかということです。そのような説明会は、桑名市や伊賀市、松阪市でそれぞれその市のPTA連合会が中心となって既に開催されています。昨年度のこの場で、委員からこの地域でもやったらどうかという意見を出していただき、今、各市町のPTA連合会にも相談をさせていただき、検討していただいているところです。実際に行うにはかなりのスタッフ数が必要で、なかなか今すぐには開催が難しいところがあります。そのため、現在は、スタッフをたくさん募って趣旨を共有することから初めてみてはどうかという状況です。まずは他地域の進学フェスタを視察し、それをもとに単独でなくても、この地域のPTA連合会が共同して実施することも考えられるのではないかと検討中です。今後、実施に向けて、どのようなステップを踏んでいけばいいかということについて、本日の協議会の後、PTA代表としてご出席いただいている委員の皆様にお残りいただきご相談いただく予定です。まず、途中経過報告ということでよろしくお願いします。

### ○松本会長

まだ計画途中ということでした。できるだけ早く実現できればと思っています。

それでは、本日の協議事項(1)「伊勢志摩地域の県立高校のあり方について」に移ります。まず、このテーマについて考えるにあたって、「地方は本当にだめになるのか、的確な時代認識とこれからの高校と地域の関係について」という演題で三重大学副学長の西村先生にご講演をお願いしたいと思います。西村先生、よろしくお願いします。

## 4 協議事項 (1) 伊勢志摩地域の県立高校のあり方について

### <講演>

#### ○西村三重大学副学長

皆様、こんばんは。私自身は地方創生に関して、様々な場所で協議に参加しています。この場の皆様方にどういってお話が適しているか迷いもあるのですが、今地域の中で動いていて実際に感じることをお話し、今後の地域の方向のあり方を考える参考していただければと思います。

実は、私自身も三重県南部の出身です。生まれは旧南島町東宮というところで、高校から下宿しました。地元には南島高校がありましたが、そこは行かないで、宇治山田高校に進学して、筑波大学に行き、その後20年間、企業で働きながら世界的を飛びまわりました。10年前に、たまたまご縁があつて三重大学の教授となり、そこで地方創生を中心とした社会連携に取り組んでいます。



20世紀から21世紀に変わった直後から、自分たちも気づかないぐらい世の中がすごいスピードで変わっています。昔のやり方は通じないけども、変わったことをしっかり理解して今の時代にあったやり方で取り組めば、地方創生は可能であると感じてきたので、本日はこの話をします。

私はもともと理系で生物学をやっていて遺伝子が専門でしたので、時代や歴史や地理や産業の話は専門ではありません。私の実体験を通じて考えてきたこととしてお話をするので、そのあたりは差し引いて聞いてください。

私自身が感じている時代背景から理解する日本社会の経済成長についてお話します。「失われた20年」と、成長がとまっているように言われますが、果たしてそうなのでしょうか。1955年から90年代までの約40年間で62.5倍までになって、もう少し前から考えると、50年で100倍もの経済成長を遂げています。これだけの成長をしたのは、日本人の性格に起因するのかもしれませんが。集団で頑張るといえることがこの成長を実現させたのかもしれませんが。後で違う角度から検討を加えてみたいのですが、現在は、成長期から成熟期に入っているのが日本の姿であろうと思います。このように捉えて物事を見ていくと、違った見方ができます。

今、安倍政権の「第三の矢」のように、更に成長を続けないと日本がだめになるような言い方がされますが、本当にそのやり方だけで、地方で起こっているこの現象が解消できるのかということを考えなければいけません。近隣諸国と比べても、既に日本は、1人当たりのGDPでいくと、韓国の2倍以上、つまりアジアで最も豊かな経済界をつくっています。そのうえでまた更に成長し続けるという今までのやり方を続けていいのかということです。

1950年ぐらいから2008年の職業別の三重県内の年収の変化を見てみます。赤と青が化学工業、材料機械などに従事する人々の年収の推移です。三重県北部のホンダ、東芝の工場などで働く方々の給料と考えてもいいかもしれません。緑が、一次産業、農林水産業で働いている方々の収入、紫がその平均です。日本中どこも貧しかった頃は、どの産業に就いてもみんな貧しかったからどこにでも住めたんですね。1970年ぐらいまでは、工業界が引っ張ったものをすべての産業で分配するような感じで、米の値段も日本のGDPの上昇以上のパーセンテージで上昇しています。つまり、地域へのお金の配分が非常にきれいにいってみんなが成長できたのが1970年代です。

この後、農林水産業従事者の年収が上昇しません。つまり、富が第二次産業に集中して、地方に対する分配がストップしたと考えることができます。高度経済成長に伴って、第一次産業と第二次産業の所得格差が開き、平均に達しない第一次産業は衰退していったと見ていくと、高度成長が終わった後の20～30年は成長をしていないわけです。それでも、その間も、高度経済成長期と同じような施策をとっていたとするとどういった結果を招いたか。例えば人口密度では、多いほうが赤、少ないほうが青という見方をしていきますと、29の市町で、北と南にはっきり分かります。年収、市町民所得、一人当たりを見ると、赤いのが300万以上、灰色が200万未満と100万ぐらい下がるのですが、実質的には半分ぐらいになる感覚でしょうか。伊勢市より南の地域の年収が非常に低くなります。このように所得格差が南部と北部ではっきり出てきて

いるのが、三重県の現状です。

その裏返しに、南部は農林水産業中心なのに、なぜか耕作放棄地の割合が高く50%以上もあります。それと、高齢化が進んでいます。

このような状況はいつごろから始まったのでしょうか。1970年ぐらいまで、私は実体験として覚えています。この頃までは南部のほうが豊かでした。少なくとも私の家族、親の世代は、シイタケ栽培をして年収1000万円ぐらい稼ぐ人がいました。漁師で船を一艘持っていて腕一本で稼いでいる人がたくさんいました。そういう人たちが今はほとんど消えかかっています。かつて、大紀町の錦には、漁師を生業としている家が100軒ありましたが、今は10軒です。私のいた南島町東宮は、平均年齢65歳で、農業で生計を立てている人間はゼロです。これぐらい産業が廃れてしまったのが、この地域の実態です。だから、人口が減って高齡化が進むのは当然です。

本当にそれでいいのかということを実際に考えなければいけないということで地方創生が動き出しました。三重県も動いていますし、国全体も動き始めた。このまま行くと国力の低下を招き、まずい状況を迎えると気づいたからです。人口は、放っておけば2100年ぐらいに4000万人ぐらいになるといわれています。つまり、日本の人口が3分の1ぐらいになるわけです。このことによって産業全体もだめになり、日本全体がだめになるのではないかとこの考え方です。

ただ、この考え方の背景には、産業や経済を中心に考えているせいもあるという気がします。本日は、その論点についてあまり深くは話しませんが、なぜ地方創生なのかという点について、国の考え方を私なりに解釈したものを簡単にご説明します。

地方から都会に出てくると、コストがかかるため都会のほうが住みにくいです。そのため、女性は結婚しても共働きしなければなりません。それと、都会での生活を維持するための収入への不安から、出生率の低下が起こり、人口減少が起こる。そして、それを埋めるために、また地方から人が出てくる。この悪循環のせいで、地方において、特に子どもを産める年齢層の女性が減ることが、人口減少を加速させています。2008年から人口減少が始まっていて、これから加速度的に減少していくことを示したのが、先ほどの予測図です。

人口減少による経済力の低下というのが、日本全体に大きな重荷になるだろうと予想されます。かつての高度経済成長のころは、貧しかった状況を一律に上げていけばいいので、一律の政策が効いたのです。だから、日本中に「〇〇銀座」をつくるとか、日本中に「〇〇道路」をつくるなど、貧しいところに均一にどんどんインフラ整備をすれば、人口も増えて日本は全体に上がっていったわけです。

でも、人口が減ってくるときには、日本全体に何かを一律にやっても効きません。インフラは全部整っているのに、地域ごとに状況が違います。地方によってその状況に合わせた原因分析と処方箋が必要となります。

だから国は、地方創生の案を、それぞれの市と町が、5年間、戦略を立てて考えてみてくださいといっています。約2600ある日本中のすべての市町村と47都道府県が、すべて独自の戦略を練って、それを5年間実行しています。実行する内容に対しては、国が予算をつけるということです。政策パッケージというのがあって、その中から選択しろということも言われ

ています。もし、各地域の処方箋に合わないことをやれば、5年やっても結果が出ないことになります。このことは、経営戦略会議などで、私が鈴木知事によく話すことです。こんなことを言うと怒られますが、今回の地方創生は勝ち残りゲームです。それぐらいの覚悟を持って、自分たちの「まち」に必要なのは何なのかを見極めて、自分たちなりの生き方を主体的に選択し、地方が独立するぐらいの覚悟でやらないとだめではないかと思います。これは個人的な意見です。

私は今、県内の7つの市町において、経営戦略会議の座長という形で、お手伝いしています。特に三重県南部の高齢化率は上がります。皆様は「だから大変だな」と思われるかもしれませんが、実は高齢者の数は増えません。特に南伊勢町は増えません。なぜかという、高齢者がこれから減っていくからです。ということは、高齢者対策として、老人福祉施設を増やす必要はありません。むしろ、それを利用する高齢者は減っていくことを念頭に置いて、今あるものを活用し、予算の構成を考えなければなりません。

逆に、もし予算に余裕があるのなら、若者に対してお金をかける可能性があるということです。このように見方を完全に転換して、ここから20～30年の間、高度経済成長で増えた人口をこの後眺めてみます。その人口が、今後は徐々に減っていくというふうに見方を変えれば、今まで一生懸命頑張ってくれた方々を、きちんと人生を全うしていただくように見送りながら、次の世代を育てることを考えなければなりません。例えば人口約8000人の南伊勢町だとすると、毎年100人の子どもが生まれるような仕組みをきちんとつくっていけば、小学校1学年100人、中学校1学年100人、高校も100人という形で教育の設計もできるのです。つまり、高度成長で少しいびつになってしまった人口構成を今調整しているのだとすると、これから20年かけてやっていくことは、継続できる安定した人口構成をつくっていくという考え方もできます。そこから逆算して考えると、それに合わせた形で教育政策もやらなければならないし、産業政策もやらなければならないということがわかります。そういうことを引くくめて町が新しくなる。つまり、「若返る」というのは、いったん過去のことは清算して新しい社会をつくることができるということです。それを地方から実現できることを示すのが、この地方創生かもしれません。

20世紀に合ったやり方と21世紀に合ったやり方は違うのではないかと思います。今までにつくってきたインフラを活用した今の時代のやり方があるのかもしれない。

私は、三重県において様々な活動をしています。例えば、旧南島町の農業が捨てられた場所で農業をやりました。稲作がだめになったのでキャベツをつくり始めました。キャベツをつくったら名古屋方面に売らなければならないとみんな思っていますが、私は、名古屋ではなくて地元で売れることを提案しました。それが最初、0.14haつまり1.4反から始めたのですが、今は5haの規模でやっています。「やり方を工夫すれば、地域の廃れた土地でもお金を稼ぐことができる。でも、それは昔のやり方ではなくて今のやり方でなければならない。」と感じました。簡単なことですが、名古屋へ売りに行かなくても、地域の中に市場があるのです。「主婦の店」のようなスーパーがあるのです。昔は、南島町にスーパーはありませんでした。だから、農協がその役割を担い、都会に売っていたのです。1970年まではそれでよかったです。それ以降は産地間競争が起こって、どんどん安値でたたかれるため、遠くから運ぶのは不利にな

り、田舎の農業は廃れていきました。

でも、今、よく見てみると、地域の中に「主婦の店」などのスーパーが出店しています。彼らはチェーン店なので、そこへ収穫した農作物を持っていくと、キャベツを500個でも1000個でも仕入れて、自分たちの店舗へトラックで運び販売できます。これが、インフラの活用です。このように、地域内のインフラは、40～50年前には考えられなかったぐらいに整っており、そのインフラをうまく活用すれば、今の時代でも地域の中で農業ができる。そのやり方は昔の流通の仕方ではないということです。50年前では考えられなかったやり方でも今はやれる。でも、そういうことに気づいて実行している人はまだあまりいないのです。もしかしたらいい時代が来ているのに、その時代を使いこなせてないのではないかというのが、私が到達した一つの結論です。

次に、三重県でもっとこの時代を生かし切ったやり方の一例として、地域内の企業と農業を一つにした取組についてお話をします。先ほどの南島町のキャベツの話は、米では全然お金にならないため捨てられた土地のお話でした。米は一反あたりの反収が13万円です。大体平均で持っているのは1町歩、つまり10倍ですから、どれだけ頑張っても米をつくっても、南島町の農家の人たちは1年間で130万円ぐらいの収入にしかありません。そこから様々な経費を引かれてしまうと、手取りが30万から40万円です。昔は30～40万円とほとんど同じ額で、子どもを大学へ行かせることができました。私の時代の国立大学の学費は、10万8千円でした。もう少し前は8千円だった時期があります。つまり、どれだけ貧しくても、どんな田舎であっても、米で現金さえ稼げれば、国立大学へ子どもを行かせることができたのです。しかし、今は、米をつくっても1haで手取り40万円ぐらいです。三重大学の学費が50数万円です。これでは、とてもじゃないですが、1人も大学へ行かせられません。それが、田舎の現状なのです。それをキャベツに変えたときに、収入はその3倍ぐらいになりました。でも、それはあくまでも現金収入を増やすやり方です。

もっともうかる農業はないのかということで、地方で様々な新しい今までは考えられない形の農業が出てきているというお話をします。

辻製油という会社は、松阪市の嬉野にあります。もともとあの地帯は菜種油を取る目的で、菜の花畑が一面に広がっていました。かつては、油を絞る会社が100社以上ありました。その中の一つが辻製油で、現在残っているのはこの会社だけです。現在、日本で4番目の搾油量です。日清オイルなどに供給しているのはこの会社です。日本のコーン油の約80%、菜種油の約50%をここで絞っています。

この会社の辻会長は、田舎がだめになったのを憂い、この地域のことを思い、様々な活動をされています。林業がダメになり、山にいっぱい木が捨てられていることを憂慮して、バイオマス利用を始めました。当時、まだ今のようなバイオマス発電というのが出てくる前です。

「ウッドピア」という団体をつくって、そこに間伐材を集めてきてチップをつくり、このチップでボイラーを炊き、製油工場全部の熱源にしました。辻会長はボランティアではなく、ビジネスとして成り立つ計算の上で実行しました。その結果、排出するCO<sub>2</sub>も削減しましたが、彼らの本当の目的はコスト削減でした。木を使うことで、補助金が入ります。かつ、ウッドチップボイラーのほうが石油を買ってくるよりも安い。売上が年間約200億円の会社で、3億円

のコストをカットしました。そしてそのすべてが利益になりました。工業界の活性化のために、使われていない山が利用できたわけです。田舎で使われなくなった林業も、今の時代にやり方を変えれば金になるということです。

辻会長が、「まだ大量の水が出るんです」と、私のところにやって来ました。この工場の熱源は蒸気です。蒸気として利用した後に、90度のお湯が残ります。「この湯をなんとか利用できないか」といわれたので、私は、30歳のトマト農家である浅井さんと結びつけました。彼は日本のトマト農家としてはかなり注目されている人物です。彼と話したときに、「ハウス栽培は儲かりますが、熱のコストがかかります。」といていたことを思い出し、「では、熱源を石油から変えたらどうか」と提案し、辻社長と浅井さんを引き合わせました。三井物産にも参画してもらい、最も新しい農業であるオランダ式のハウス栽培に取り組むことにしました。オランダから高さが6メートルのハウスを買ってきて、スイスから独占的に使える種を入手して、それで「うれし野アグリ」という会社をつくって、ここで先進的な農業を始めました。日本の路地で採れるトマトの量の8倍の生産性があります。ですから、土地生産性は日本で最も高いといえます。

こういったことは、田舎だからできたのです。田舎の畑のど真ん中に、この辻製油という会社があり、その周りは全部田んぼです。でも、田んぼは活用されていませんでした。みんな土地を手離したがついていました。23号線バイパスを松阪から久居のほうに走っていくと、左側に真っ白な大きな2ヘクタールのハウスの建物が見えます。3年前に私がお二人を引き合わせてから、1年ぐらいで計画し、約1年前にこのハウスが建ちました。現在の反収は1500万円です。つまり稲作の100倍ぐらい儲かっています。昔だったら、工場と農業をくっつけるのは考えられないと思います。でも、今の時代だったら、使われなくなった農地をうまく使って、高度な農業に変えていくと、田舎でも金が稼げるということです。

今までのお話の中の共通項は、20世紀と21世紀とで考え方を变えるということです。昔は田舎には何もなかったです。私もよく知っています。南島町から1時間に1本のバスが伊勢市に出ていました。伊勢市は都会だと思っていました。それが、わずか30~40年の間に世の中がひっくり返るようになり、インフラが整いました。一家に1台から2台の車を持っている。インターネットは届く。それに宅配便は日本中隅々まで物を届けてくれる。どんな田舎にもスーパーマーケットはある。つまり東京とそんなに変わらない生活が田舎でできるわけです。最も重要なのは、こんなに周りの状況が変わったというのに、そこで生きる人の考え方が変わっていないことなのです。昔のままのやり方、高度経済成長時代の考え方をしている。それを切り替える意識改革さえできれば、もしかしたら今の時代はおもしろいかもわからないということです。それがどれぐらいの感覚かというと、右回りが左回りになるぐらいです。先頭がビリでビリが先頭になる感覚です。三重県南部は田舎なので、徹底的にビリだと思っています。特に南伊勢町は三重県の中でも断トツでビリです。人口1万人以上の市町村で高齢化率が日本で2番目に高いのが南伊勢町です。ということは、日本のビリが南伊勢町なのです。だから、ここで人が住めるようになったら、これからの日本が変わっていける証になると思い、南伊勢町での活動に取り組んでいます。もしかしたら、「大きいことが不利である」ことが、20世紀と21世紀における考え方を变える一つのヒントです。シャープが今苦しんでいることを

見ていただけるとよくわかるかもしれません。大企業のシャープが苦しんでいる一方で、三重県の南部にある辻製油という中小企業はととても儲かっています。大企業や都会でなければだめだという考え方から脱却できるかどうか。田舎でも知恵と工夫で金を稼げると発想を転換できるかどうか。三重県南部でも、徹底的にやれば東京にも勝てるし、世界でもトップになれる。実際、「辻製油」や「うれし野アグリ」は日本でトップの収益性をあげています。台湾とかアジアにフランチャイズを出そうかという話もあります。地方から直接海外とも商売ができるインフラが整ったこの時代において、地方がビリである必然はないということです。

「地方から世界へ」という物流に関して、少し簡単な話をすると、「もの」をセントレア空港に夕方5時まで持って行けば、アジア地域であれば翌日の昼までにすべての地域に届きます。輸送費に関して、政府の沖縄振興策により、沖縄から空輸されるコンテナ貨物の運賃は現在ただになっています。沖縄から海外に空輸するコンテナの中に、沖縄産のものが51%以上入っていたら、コンテナの残りのスペースに沖縄県以外の産品を入れてもよいことになっています。つまり、沖縄まで運べば、そこから先はただなのです。そこで三重県では、セントレアから沖縄までの航空貨物運賃に補助をすることにしました。そうすると、航空便のほうが船便より時間が早く着き、より安く送れることになります。これによって、三重県南部から直接シンガポールや台湾とやりとりができる。実際にシンガポールの人が、シンガポールで楽天のホームページから、紀北町の干物を注文すると、翌日の昼にはシンガポールの食卓に届きます。それも運賃は船便より安いのです。こういうことが今起こっています。この仕組みを利用して、紀北町のある企業は、ハラール認証を受けた魚の離乳食をシンガポールで販売しています。昔の三重県の南部では絶対考えられなかったことです。

我々を取り巻く状況は、これぐらいドラスティックに変わっているのです。ドラスティックに変わった地域を使いこなす人材が今求められています。そういうことに気づき始めた特に20代から40代ぐらいまでの若者たちが、三重県南部に農業や漁業を生業とするために戻って来ています。先ほどご紹介した世界一のトマト工場を作った浅井さんは、今月16日に国連で、「新しい時代を代表する農業者」に選ばれてプレゼンする予定でした。フランスで今あのようなテロが発生したのと、彼自身が忙しくなり参加できなくなったのですが、そういう人間が津市にいます。そういう若い起業家が次から次へと出てきています。

石黒さんという青年は、京都の大学を出てから、技術者として大企業で働いていました。そこに見切りをつけて、アメリカで2年間農業修行を積んだのち、現在は、一本のツルから1個のカボチャをつくるという農法で、京都の老舗の料亭と契約栽培をして、農業一本で生きています。垣内さんは、ミカンで三千件の契約栽培をしています。彼は、1年に箱詰めの段ボール2つのミカンを送るという契約を年間五千元で、三千件結んでいます。つまり契約で金が取れるという仕組みを作っています。

こういうふうを考えていくと、地方でも知恵と工夫次第でいくらでも金は稼げる。むしろ、場合によっては、東京よりも稼げます。私は彼らに、「年商一千万円にならなかつたらやめろ」といっています。そういう若者の農業者が集まった団体ができて、一種の農家連合を形成しています。現在、30人以上のメンバーがいて、どんどん増えています。

漁業でも同様の動きがあります。紀北町の西村さんは、4年前に地元に戻ってきて、アオサ

の漁師のもとで修行しました。彼は技術者なので、海面にピンと張った形にしてアオサの種付けをすると、とても良い色のものができることに目をつけました。朝4時に起きて、徹底的にその手法にこだわって取り組みました。そうしたら、2年目に品評会で1位を取りました。3年目から、年間4カ月間働いて約600万円の収入があがるようになり、去年はそれが約一千万円になっています。つまり、南部には資源がたくさんある。土地もたくさんある、漁場もたくさんある。これを今の時代に合わせて使うかどうかポイントなのです。

今、日本の人口は本当に適正なのかを考えてみます。江戸時代は一千万人ぐらいから、国が安定したために三千万人まで増えて、それ以上は増えていません。私はここに一つのヒントがあると思っています。約300の藩が緩やかな連合国を作っていたのが江戸時代の日本です。徳川家康が取った政策は、日本全部を力で抑えるのではなく、各藩を独立採算でまわる経済圏として独立国のようにして生かしながら、それらを緩やかに束ねて分割統治する連邦国家をつくっていたのが実は江戸時代です。これが時代に安定をもたらした鍵ではないでしょうか。江戸幕府までは、戦国の世の中だったため、安定した新田開発ができませんでした。土地をつくってもいつ奪われるかわからないわけです。だから、徳川の時代になり安定した後に、活発な新田開発が行われ、これが高度成長をもたらし、その結果、人口が2倍から3倍ぐらいになります。

明治維新以降の高度経済成長によく似ていますが、一つだけ違うのが鎖国政策でした。鎖国で海外との扉を閉ざしました。その当時は、日本単独で十分な経済圏でした。当時の人間が一生で移動する距離が大体10キロ圏内と言われていた時代です。そういう時代においては、日本という国は十分大きかったわけです。その中に約300の小さい藩があって、国内需給の経済システムで300年ぐらいは続けることができたわけです。高度成長が終わった元禄時代になると、文化の花が開きます。経済が成長し、ある程度インフラが全部整って、日本中どこでも貨幣経済が行き渡ったことが原因です。漁業、林業、農業、何をやっても金に換わり、その金により着物を買ったり、酒を買ったり、陶器を買うことができる。そうすると地域ごとに様々な特徴が出てきて、それぞれが地域の特性を生かしながら、自立型の経済圏ができあがってくる。そうやって約300の藩が独立国家のように生きていたのが江戸時代です。

その当時の日本の物価はどのようであったかは、まとまった統計としてはありませんが、米の値段を指標として見てみると、変化していません。新田開発を伴った高度成長をした100年間は、確かに人口も経済も大きくなりましたが、それ以降は規模が変わっていません。

日本が今いる状態もこれと似ています。インフラ整備してやっと1990年ぐらいに世界でトップになった。トップになってどうするのか。次は、これをいかに横に維持するかを考える必要があります。

江戸時代の安定していた時期は、江戸の人口は約100万人で、世界で最大の都市でした。大阪、京都でも40万人以上いる。つまり、大阪と京都を合わせて考えると、100万対100万規模の町が東西にあったということです。それらを結んでいた東海道は、世界で一番人通りが多い道でした。つまり、その当時の日本は、世界でも最も豊かだった国かもしれないということです。18世紀の江戸時代が「泰平の世」と言われる所以は、おそらくそういうことなのでしょう。その時代の重要な施策のポイントは、自立した地域自治を行う約300の藩

が小さな国家として存在し、それらが緩やかにまとまる連合国であったということです。このシステムのおかげで、日本は200年にわたって安定したわけです。これを、これからの時代に当てはめて考えると、地域が強くなり独立することがものすごく重要であることがわかりいただけると思います。

ただ、江戸時代には鎖国政策を行いました。そのため、他の国の情報が入らなかった。その中で、海外では18世紀後半に産業革命が起こりました。鎖国のために、世界の経済発展から一気に遅れてしまったのが日本の弱味だったのです。それに気づいたのが、おそらく江戸末期です。黒船が来て開国して、薩長が一番危機感を持ちました。明治維新は、国の政権を変えて一気に列強諸国に追いつかないと日本が植民地になると考えてやった非常事態措置です。もしかしたら、明治維新から1990年までの日本が一気に駆け上がった状況というのは、列強諸国に対して危機感を持った日本が、非常事態宣言を出し、国民総出で日本国をもう一回作り直した時期だと考えることができます。それが終わったのが1990年だとしたら、そこから先は、江戸時代の泰平の世をつくるような方向性が適しているのではないのか。そうであるなら、その中で最も重要になってくるのは、江戸時代の各藩が、自立を盾に自ら生きていくという、「自らを律して自ら立つ」という「自律による自立」が重要ではないかと思うわけです。この考えに基づいて、第1回の三重県総合政策会議において、鈴木知事にも、「三重県は独立国を目指してください」と言いました。これは皆様にとっては相当ショッキングだったようですが、その根底には、こういう考え方があります。

今はものすごくいい時代です。日本人が全員で頑張って、やっと20世紀に世界でトップになりました。トップレベルの豊かな経済をどう使いこなすかが21世紀です。だから、自ずと21世紀のやり方は違うはずです。そのヒントは江戸時代にあると思います。明治維新から高度成長期までは非常事態措置であり、欧米諸国に追いつくための社会基盤をつくる時期でした。だから、個人ではなく集団で、地方分権ではなく中央集権で取り組む必要がありました。でも、成熟期つまり21世紀は、集団ではなく個人の力が、中央集権よりむしろ地方分権が大切となります。各地域がどうやって「自律」し「自立」するかが重要なのです。

そのための人づくりが大切になってきます。私は、津高校でゼミをやっています。先日は昂学園でもやりました。鈴鹿中学校でもやりました。今後、南伊勢高校でもやります。あしたは尾鷲高校でやります。今度は中学校、小学校でもやっています。今日と同じような講演において、「自分たちで生きるとはどういうことか」という思考型のゼミをやります。こうやって子どもたちを啓発しています。

今、日本は世界でトップレベルの社会基盤をもっています。これをどうやって使いこなすかが大切です。整ったインフラによって、地方から世界に情報発信できる時代です。だから、各地域は「グローバルオンリーワン」を目指す取組を始めなければなりません。地域から世界を見て、世界の中で「ナンバーワン」「オンリーワン」になっていけば、世界中が注目し、世界中の人々が物を買ってくれるわけですから、地方は生き残れます。各地方の特徴を磨き上げて、世界にアピールできる品質をつくり出すことが必要です。既に日本は世界一なのですから、日本で一番になれば、自動的に世界一になります。日本でオンリーワンなら世界でオンリーワンになれるのです。特にアジア諸国は、日本のものを欲しがっています。高い品質と広い視野を



持っていれば市場開拓が可能で、これが地域発のイノベーションです。

私は9年前に三重大学へ入りました。地域イノベーション学研究科という大学院をつくり、その中に約100人の中小企業の社長たちを入れて、彼らに今お話したことを理解してもらい、三重県全体にこの考えを広めることを目指しています。日本の中で三重県はものすごく光るであろうし、三重県が成功し日本のモデルになれば、日本全体は変わると信じています。そういう夢を持って三重大学で仕事をしています。

これから地域に必要なのはプロフェッショナルです。プロというと、スポーツ選手を思い浮かべますが、彼らだけがプロフェッショナルではありません。もっと違う言い方をするなら、どんな仕事でもそれを研ぎ澄まして極めた人が本当のプロフェッショナルです。このような人が、昔は、各地域至る所にいたのです。しかし、高度経済成長期にみんな自信をなくしてしまっただけです。自分の腕で稼げる漁師もいた。自分の腕で稼げる農家もいたのです。それがいなくなりました。でも、それを今の時代に合った専門的な技術で稼ぐのが新しいタイプのプロフェッショナルだと思います。地域の小学校、中学校、高校が地域人材の育成という役割を担っているのであるなら、林業のプロ、農業のプロ、漁業のプロをつくれとまでは言いませんが、人づくりをする際にそのような観点ももっていたほうがいいのではないかと考えています。

このようなプロフェッショナル人材がいて、その人たちを束ねて引っ張っていき、世界へつなげる発想ができるようなプロデュース人間がいたら地域は確実に強くなります。これは実現できるはずで、実際に私は何人もそういう人たちとつき合っています。

これからこの次の世代をつくるのに、地域の高校は重要だと思います。これはあくまでも私の勝手な考え方なので、ご参考にしていただければいいのですが、地域の高校の存在は大切だと思います。私は、高校進学の際に、南島高校と宇治山田高校を比較して、当時は宇治山田高校へ行ったほうが良いと判断し、進学しました。しかし、もし今、南島高校があつて、南島高校が「地域のプロをつくる学校」であつたなら、もしかしたら南島高校に進学していたかもしれませぬ。地域にあつても、「世界が開ける」「夢が開ける」という高校だつたら進学すると思ひます。

そういう意味でいうなら、地域の生徒が選択して進む高校でないと、地域の高校の存在意義はないと思ひます。その他大勢が誰でも行けるような私立高校が伊勢にはたくさんあります。もし地域の中に高校を残さないのなら、そういう選択肢もあるでしょう。まだ先に進路選択をするような形で普通科高校へ進学すればいいと思ひます。地域の高校こそ、地域に必要とされて選択されるべき特徴がなければいけない。例えば地域のリーダーをつくる学校などのコンセプトが考えられます。地域リーダーになるためには、地域をとことん知る必要があります。地域には、今日お話したような可能性があるのだということとか、こんなに格好いい人がいるのだということを生徒たちに知らせるのです。そのためには、地域が本気で人を育てる、つまり、高校だけに任せるのではなくて、地域の人たちがその地域の子どもの育成に参画する必要があります。例えば、部活動や学校行事が、生徒数が少ないためにできないというのなら、地域の中でクラブチームを作ることがその解決につながります。そのクラブチームの主将を高校生に努めさせれば高校生にリーダーシップを教えられます。逆に少ないことを優位にするような作戦は、知恵と工夫で考えられるはずで、

それと、これから田舎に住もうという人たちは、都会に行く人たちよりもっと積極的な理由があるはずです。昔は、仕方なく田舎に残っていたかもしれませんが、でも、人口が減っていく中で、あえてそこに住み続けたり、わざわざ外部からやって来たりする若い人たちというのは、何らかの動機が強いはずです。だから、そういう前向きな人たちをうまく束ねれば、もしかしたら地方において、三重県一の進学校がつかれるかもしれませんし、日本一の職人学校ができるかも知れません。そういうようなリーダーを育成するような学校にしたらいかがでしょうかというのが、これからの高校のあり方に対する私からのちょっとした提案です。

本日は、時間の関係でかなり雑な話になりましたが、地域が随分変わってきている状況と、勝手に諦めたら全部だめになるという点を押さえていただければと思います。少し長くなりましたが、私からは以上です。

### ○松本会長

西村先生、どうもありがとうございました。

三重県南部の地方創生や活性化について、ドラスティックなお話をいただきました。この協議会において高校生の将来のことを考える際に、非常に参考になるお話だったのではないかと思います。西村先生がせっかくおみえですので、ご質問、ご意見を交わしていただき、我々の今後の協議の内容に生かしていきたいと思います。どなたからでも結構ですのでお願いします。

### ○池田委員

ありがとうございました。今までこの協議会においては、生徒の数が減るので、どの学校の定員を減らすのかというような話しかしてこなかった気がします。諦めるのは簡単ですが、厳しい状況の中でよりよい教育環境を生み出すためにどうしていったらいいか、知恵を絞り出さなければならぬと改めて思いました。

安倍首相の地方創生政策は自己責任論に基づいたもので、生き残ったところだけ残そうとしている気がして非常に気味が悪いのですが、どの地域も全部が頑張っただけで生き残ろうとするうえで、非常にいいお話を聞かせていただいた気がしています。

私は高校教員代表で来ています。本当は子ども中心に考えなければいけない訳ですが、そのためには地域社会がしっかりしていかなければいけないので、プロデューサーになれるような人材育成が鍵だと思います。私は明野高校に勤務していますが、農業・家政・福祉などの学科があります。彼らにも、技術だけではなく売り込む力もつけてやる必要があると常々思っていますが、その点に関して何かよいアドバイスがあったらお願いします。

### ○西村副学長

どうやってプロデューサーをつくるかということですね。ものすごく偉そうに言うと、私自身がプロデューサーです。私は南島町の田舎の出身で、両親は中学校しか出ていません。つまり英才教育などは一切受けていません。地元からはい上がってきた人間です。いまの私をつくったのは好奇心だけです。世の中を知りたいという好奇心を糧に、自分の力で私はここまで来

たつもりです。つまり、ロールモデルは自分だと思っています。宇治山田高校の私の同級生はなぜかそういう人物が多くいます。今、三重大学に私の同級生が私を含めて教授で3人います。一人は、海底の土を何年も掘り研究を続けている男です。三重大学が初めて生物資源学部において本格的な教授の公募をした際に230倍の倍率を勝ち残って採用された人物です。もう一人は、「国境なき医師団」に入って、恵まれない国で医師として活動している医者です。乳がんの専門ですが、彼女のために三重大学は新たな役職をつくりました。実は私自身もそうなのですが。

何が言いたいかというと、当時の宇治山田高校の教育の仕方が一つのモデルではないかと思うのです。少なくとも今ご紹介した、私を含んだその3人は社会を変えるプロデューサーとなっています。とすると、昔はそのような人材をつくれたわけです。では、それが今はできていないのでしょうか。今の時代のやり方やできる素地はきっとあるはずです。その子たちを本当にそのまま伸ばせるかどうかです。それに挑戦するために、私は5年前から津高校で「西村ゼミ」を開いて、課外授業を通じて、「生きることとは何か」を問うています。私は、基礎教育はできません。これは教育のプロである先生方がやらなければなりません。そのうえで、今の時代を生きるというモチベーションをつけるのは、先生方が社会とつながって、生徒たちに必要だと感じる人を連れて来て聞かせればいいのです。今の子どもたちには、かつてのように、社会との接点がありません。つまり、彼らが生きていくための夢になれるような人間が身近にいないのです。社会と接点がないから、それがわからないのです。今の子どもたちは、基礎力においては昔の子どもよりも上です。そこに、今の時代の生き方がわかりモチベーションが高まれば、放っておいても伸びます。私は今、その実験を津高校でやっています。5年間やり、私はかなり自信を持っています。津高校の雰囲気は、昔の宇治山田高校と似ています。

津高校だからそのような取組ができるのではないかと思うかもしれません。実は先日、昂学園へ行って同様の取組をし、可能性を感じています。理想の教育をする際に、すべてを高校の先生に負担させるのは申し訳ないと思います。今の時代はそんなに簡単ではないからです。高校の先生たちがやれることはしっかりやっていただき、その上で先生自体もプロデューサーになって、この子たちに何を教えなければいけないかということ把握し、足りない部分や先生方ができないところをプロに任せるというアレンジをすればいいのです。そういうことも含めて、すべてが私は教諭だと思うのです。それがプロフェッショナルとしてのこれからの教育者の姿ではないかと思っています。

## ○松本会長

先生が、この地域に戻ってきた理由はなんですか。三重県南部を思う気持というのは、どういったところから生まれているのですか。活動する地域はどこでもよかったのでしょうか。

## ○西村副学長

私の活動は三重県だからできているし、私は三重県以外ではやらないです。

私はずっと札幌でベンチャー企業の社長をしていました。実は今も、三重大学をやめて会社の経営者にならないかという誘いはいくつも来ています。でも、私自身が、一番やりたいのは、

この仕事です。これが一番おもしろいからです。同様に思っている人たちは、ある程度年齢がいけばいるのではないのでしょうか。これは小さい頃に自然の中で、徹底的に地域教育を施されたことに起因すると思います。おっちゃんやおばちゃんたちからいろいろなことを教えてもらって、先輩や後輩らと縦割りで遊びまわった田舎のあの雰囲気大好きです。でも、頑張れば頑張るほど、そこから出ていかなければならなかったという現実も、当時の田舎にはありました。「勉強がよくできるからおまえは三群へ行け」とか、宇治山田高校を卒業したら、「大学に行け」とか、大学出たら、「いい会社へ入れ」とか、頑張れば頑張るほど地域から離れなければならなかったのが私たちの世代です。

今は頑張ったら残れるのだということや、小さい頃から地域のよさや地域の歴史、まちの優しさなどに親しんでいけば、その子たちは「地域おもい」になると思います。生まれたところが嫌だという子は、本当はいないはずですが、嫌だと思わせるのは何かというと、地域が嫌だと思っている大人たちなのです。だから、この地域が大好きな大人たちがキラキラ輝いていけば、子どもたちは故郷が好きでたまらなくなります。そしたら、後は、「いっぱい勉強して、本当に力をつけないと戻ってこれないよ」といったほうが、多分戻ってきます。そんな気がします。

## ○片山委員

教育長となり、ふるさと教育の重要性を意識しながら、自分なりに考え取り組んできました。ふるさと検定のために「あばばい南伊勢学」というテキストも商工会につくっていただきました。小中学校の子どもたちが自分のふるさとを誇ることができれば、それが郷土愛になり、国を愛する気持ちにもつながっていきます。その基盤になるのはふるさと教育であると思っています。

南伊勢高校南勢校舎において、地方創生のリーダー育成を目指しながら、地域創生進学コースや、町外からの入学者募集や、SBP（Social Business Project）に、かなり力を入れて取り組んでいます。私は、このような取組が、南勢校舎だけではなく、伊勢・志摩・度会、もっと南部のほうも含めて広げていく必要があると思っています。一次産業が衰退化しているこれらの地域において、高校におけるこれらの取組を生かして地域の活性化につなげることができるのではないかと考えるからです。この考えに関して意見をお聞かせください。

## ○西村副学長

今おっしゃったとおりの高校をつくってほしいと思っています。連携すればいいではないですか。南伊勢の高校に行けば地元の若手の漁師たちと話ができるようなインターンシップ的な活動ができるようにすればよい。それらの取組は校舎を越えてもいいと思います。例えば南勢校舎は漁業、度会校舎は農業、昂学園高校は林業という具合です。これらの地域にはいくらかでも空き家や空き校舎があります。1学期は南伊勢町、2学期は大台町、3学期は度会町というように学ぶ場を移動していけば、本当の意味の地域を知り、本当のプロフェッショナルと触れ合いながら学ぶ事ができます。

あと、その学校に行けば徹底的にそのことが学べるというなら、1学級あたりの人数が少なくてもいいと思います。その代わりに、本当にその職業で生活できるだけの教育を施す。最初は

そのコンセプトに基づき、一貫していろいろな地域を知って、地域の中でここに行けば農業のプロと、ここに行ったら林業のプロと、ここに行ったら漁業のプロとしっかりした密度の濃い勉強できるという連合高校のようなあり方も面白いと思います。

私は高校の仕組みはよくわからないし、全く間違っていることを言っている可能性もありますが、地域の子どもたちに自分の地域を伝えながら、地域のリーダーになるということを徹底して育てていけば、最終的には多くの生徒がその地域に根付くような気がします。南伊勢町とか度会町とか大台町とか一つひとつにあまりこだわらずに、この地域一帯を「三重県南部藩」と捉え、「三重県南部藩」の将来の人材をつくる目的で、藩校をつくる感覚がよいと思います。その藩校の中に4ヶ所ぐらいの分校があって、それらをグルグル回しながら若者を育てるという仕組みがあってもいいと思います。それぐらい発想を転換して、今の時代にあった人材を生み出す教育の仕組みを考えればよいのではないかと思います。私の発想はまだ粗いものなので、具体的にこういう型が素晴らしいという青写真があるわけではありませんが、理想としているコンセプトをご紹介します。

### ○松本会長

地域をまたいで教育する案をお話いただきましたが、三重県立高校である以上、高校生一人当たりにかかる県税には制限があるわけで、ある地域に限って少人数教育を実施すると、どこかから財源を捻出しなければなりません。ただ単に既存の学校を使って新たな仕組みを作るということはなかなか簡単にはできないという現実もあります。

### ○本多委員

私は、伊勢市の行政会議にも参加させてもらっています。2060年ぐらいには伊勢市の人口が6万人になるという統計が出ています。つくば市は、教育しやすい環境が整っており教育水準が非常に高いことと、都市圏へのアクセスがよいため、人口が増えているということを知りました。こういう事例から、人口減対策として、教育水準を高めるというのも一つの案だというお話をしたことを思い出しました。

今、お話を聞いていて、三重県南部でプロフェッショナル人材がつけられる地域があるなら、他地域からも流入してくる可能性があると思います。そこへ永住して、そこで家庭を持って子どもを産めば、必然的にその地域の人口は増えていきます。教育水準だけではなく、教育を大切にしている地域であるということで注目を浴びるのも一つの手だと思います。この辺は一次産業が多いので、一次産業のプロフェッショナル育成という方向性はよいと思いました。

各市町が単独で取り組むだけでは、状況の改善はなかなか厳しいと思います。防災の面でも広域で計画を練っているように、大きな地域を意識して子どもたちを見ていくことが大事だと改めて思いました。

### ○西村副学長

私はつくば市に11年間住んでいたもので、言われることはよくわかります。あの地域は、本当に昔は誰も住みたがらなかったエリアです。「つくばエクスプレス」ができたおかげで、東京

への通勤圏内になって、人気上昇しました。あの地域の真ん中にある竹園校区というのは、子どもたちの学力がナンバーワンです。筑波大学があり、その教職員の子もみんなそこに行っていることもあり、高い教育水準を保っています。

これは、三重県南部でもできると思います。つまりは人が減ったことによって密度が上がれば、子どもはそれによって伸びるのです。私が在籍時の南島中学校がそうでした。粗く育てられたことが良かったのかもしれませんが。現在の南伊勢町もそうですが、人が減ったことによって密度が上がれば、小学校の学力調査は上位に入っていくのです。

次は、そこにリーダーをつくるという視点を加えれば良いと思います。一次産業は、これからのすごくチャンスです。従事する人が一気に減るからです。その結果、土地や漁業権が余ってきます。そうすれば、今の時代のやり方さえ間違えなければ、そこで年収1000万円ぐらいは稼ぐことができるのです。そのやり方を三重県南部地域において、高校生に実証的に教え込んでいけば、彼らは近い将来の一次産業のリーダーになります。そうした若者たちは、三重県南部にとどまってもよいし、日本のいたる地域で土地が余ってきますから、日本中どこでも農業や漁業に取り組むことができます。ということは、全国からそういう若者に来てもらってそれぞれの地域に返すというリーダー養成高校にしてもいいわけです。生徒の半分が三重県出身、残りの半分は他県の出身であれば、豊かな多様性の中での教育も可能になります。その生徒たちが、南伊勢町の港町や、山深い大台町にも定住している。他県から来た子は他県に戻るのもいいではないですか。大切なのは、他の県に気づかれる前に、このような先進的な取組に真っ先に着手することです。こういう取組がもしかしたら全国のスタンダードになるかもしれません。だから、このことを地域連携でできるだけ早くやっしまえば、絶対いいと思います。教育のために、最高のフィールドとなります。

中山間地で一番難しい農業で金を稼げるということは、ある意味チャレンジできるということなのです。紀北町の速水林業も林業では最先端を走っている企業です。つまり、一次産業の先端のことを勉強する実践教育の場として、三重県南部は最高の環境が整っているのです。そういうことを利用していけば、新しい農業、新しい漁業、新しい林業を引っ張る人間を三重県南部地域から輩出できるでしょう。

## ○掛橋委員

西村先生のお話を聞いて、やる気が高まりました。

私も旧南島町の神前浦出身です。10年前に地元に戻ってきて、父親の後を継ぎ、今はマダイの養殖に取り組んでいます。現金を稼ぐために、体験漁業のイベントのコーディネーター役など、いろいろ取り組んでいます。日々、反省の毎日です。

まず、10年前に地元に戻ってきた時、田舎が本当に廃れたと思いました。ただ、人の考え方は、先ほどの先生の話にあったように変わっていませんでした。私の妻も東京出身です。その友達も多くは町外出身のお母さんたちで、話になるのは教育の話です。「いいところに進学をさせたい」、「いいところに就職させたい」という話題です。そうになると、昔と変わらずに、「いい高校へ入りたい」という目標に行き着きます。なかなか地元の高校に対して意識が行きません。私自身も体感してきましたが、生活は本当に厳しいです。本当にまともな生活ができてい

る人たちが何人いるのかというぐらい、かなり年収も減っていますし、逆に物価は上がっています。だからこそ、今、田舎でどういった生きがいを見つけてやっていくかということが、非常に大きな課題であると日々、痛感しています。

今回の話にあったとおり、この田舎をどうやってうまく活用していくのかという点と、保護者たちの意識改革をどのように進めるかという点が非常に大きな課題だと思っています。

## ○西村副学長

そのとおりですね。私は子どもがいないので家では教育をしてないのですが、私の同級生とかも、どうしても都会のいい高校やいい大学へ行っていい職につくほうがいいと勝手に思っています。これは事実です。

私は、南島小学校、南島中学校というど田舎の学校で教育を受けました。そのときの原体験が高校、大学のあるものすごいバネになり、おそらくすごく伸びることができたと思っています。私は、都会でやっても圧倒的に勝てる自信があります。なぜかというと、田舎出身だからです。田舎育ちの私は、自分の力で物事を切り開く力があります。でも、都会のエリート校出身者は、新しい問題を解く力が弱いのです。というふうに考えると、まず、「将来幸せになるために都会の進学校に進むべきである。」という神話を疑う必要があるのではないですか。もし、その結果、都会の大企業に就職できたとしても、これからはますます競争が激しくなります。都会であるほど、大きい企業ほど、ものすごい競争にさらされることになるでしょう。これから東京の大企業の求人半分ぐらいは世界から公募することが当たり前になります。例えば、製薬会社の研究職への就職を想定すると、ライバルは日本人ではなくドイツ人やアメリカであり、彼らと勝負しなくては行けない。そういう状況の中で、東京大学でそれに見合う人材育成ができていくかという、できていません。大学の最後の4年間ではつukれないのです。そのもっと前から、基本的な生き抜く力のようなものをどうつけるかが大切なのです。ということは、田舎で自分ではい上がるような人間が最後に勝てます。これは私の原体験から来ています。私は、医師資格もないのに最年少で三重大学医学部教授になりましたから、一応皆様には成功モデルに映るでしょう。でも、実は、底辺からはい上がってきた人間です。私のような人間がどうやってつくられたかということを見れば、その人間がこういう実体験を話せば、そのことを信じてもらえらると思ひ活動を続けています。

本日お話したように、「時代は変わった」ということをはっきりと保護者の方々にも伝えていくことが重要です。それと、プロフェッショナルをつくる教育は、一次産業で活躍する人間を輩出するだけではなく、世界的に活躍できる人間の素地にもなると思うのです。そういう高校出身者が東京大学へ進学してもいいではないですか。大学入試改革により、基礎知識だけではなく、生き抜く力を評価する入試選抜がこれからおこなわれるかも知れません。自分で生き抜く基礎力を持った高校生に、大学において高等教育を受けさせたほうが、その分野の研究者やビジネスマンとして活躍できると思います。

「土台をつくる高校」、「リーダーを育成する高校」というのは、そういう意味です。それを足場にして、田舎で生き抜く、一次産業で生き抜くことを、プロフェッショナルを目指しながら教育していけば、そこでついた力はどこにでも応用できる力になると思います。そういう高

校なら、自分たちの子どもを行かせたいと思う大人が出てくるはずです。その後、その子が行きたいというなら東京大学を選んでもいいし、田舎で農業やってもいいわけです。そういう高校が地域にあれば、地域の大人たちも地域の子もたちを自分たちでつくるという気になるのではないですか。日本中から多くの生徒が、その高校を目指してきて、地域が元気になるということも、副次的な産物としては考えられるでしょう。せつかく高校の改革を考えるのであれば、そういうしたたかさを持って取り組めばおもしろいと思います。三重県南部地域には、そういうことができる要素が詰まっています。北部ではできません。今のところ、順調に行っているからです。でも、三重県南部地域なら、変えることができます。日本で一番先進の高校やシステムをつくるぐらいのしたたかさを持って考えてもいいのではないのでしょうか。

## ○松本会長

保護者を含め、考え方を変えなければならないというご意見です。

西村先生の話の中にもありましたが、それなりのプロの方を招へいするなりしてモデルを見せていくことがアピールになるということです。特に各地域が高等学校と連携する際の具体的な取組として、お金を出すだけではなく、そういうモデルとなる人物を見つけ、学校とつなげることが大切だと理解しました。それがこの地域全体としての動きとなれば、また新しい方向性が見えてくるように思います。

また、昨年実施した山口県のベンチマーキングにおいても、いくつかの高校が連携し特色を出し合っ共有している例を見せていただきました。例えば、工業高校と商業高校が連携することで、商業高校にしながら工業の資格を取ることができたり、少人数だけれども進学コースをつくって地元の多様なニーズに対応したりなど、そういったところにもつながるような気がします。

本当は皆様にたくさんご意見をいただきたいのですが、この後もまだ議事が残っています。この後も西村先生には協議にご参加いただきご意見をいただきながら進めていければと思っていますが、よろしいでしょうか。

続きまして、②伊勢志摩地域高等学校活性化にかかる保護者等への説明について、既に実施されている志摩市の内容を含めて、事務局から説明願ひ、その後で皆様のご意見を伺いたいと思います。

### (1) ②伊勢志摩地域高等学校活性化にかかる保護者への説明について

## ○事務局

それでは、資料の15ページと16ページをご覧ください。今年度の取組として、保護者、地域の皆様にこの地域の高校を取り巻く状況を説明し、ご意見をいただくことを進めています。ご覧のように、各地域における予定が決まっています。今、会長からご紹介がありましたとおり、3番の志摩市については、志摩市PTA連合会から、毎年10月に実施しているPTA連合会講演会において実施してはどうかというご提案をいただきましたので、PTA主催の行事の中で既に実施させていただきました。まず、志摩高校と水産高校の生徒による「東北交



流ボランティア」の活動報告を行い、鳥羽・志摩・度会地域の4つの県立学校の校長が参加して小規模校の魅力を語るパネルディスカッションを行いました。その後説明会を持ちました。前回の協議会の中で、説明会において趣旨がうまく伝わるか心配であるというご意見をいただきましたので、まずデータを中心に伊勢志摩地域を取り巻く状況を説明し、参加して下さった保護者や地域の皆様に将来の高校のあり方について考えていただき、ご意見を言っていたくという構成にし、「伊勢志摩地域の高等学校を考える会」というタイトルにしました。これは、こちらが一方的に説明するというのではなく、皆様からのご意見を頂戴し、一緒に考えていただくという趣旨に基づくものです。

他の市町での開催予定としては、伊勢市が1月20日に予定しています。こちらでも「東北交流ボランティア」に参加した中学生によって活動報告をしてもらう予定です。

鳥羽市は1月23日(土)に予定しています。鳥羽高校の生徒による、「東北交流ボランティア」の活動報告や、「観光プランコンテスト」の優秀賞受賞報告なども合わせて開催する予定です。

度会郡は非常にエリアが広いので、郡全体ではなく各町別に開催すべきであるというご意見をいただきましたので、玉城町、大紀町、南伊勢町、度会町の4カ所で開催予定です。玉城町と大紀町は現在日程を調整中です。おそらく1月下旬になる予定です。南伊勢町と度会町は、それぞれ「東北交流ボランティア」に参加した生徒の活動報告も合わせて行う予定をしています。主には1月中頃から後半にそれぞれ実施させていただき、そこで頂戴したご意見を次回の協議会で報告し、より具体的な協議につなげていきたいと思っております。

17ページが、各市町教育委員会から各小中学校を通じて、生徒、保護者に届ける予定のチラシ(案)です。

志摩市だけは既に実施しましたので、本日はそこでいただいたご意見を紹介します。その前に、「考える会」において説明する予定の内容を少し聞いていただこうと思っております。実際は、30分ほどかけて説明する予定にしていますが、時間の関係で、10分ほどに短縮して、担当からご説明いたします。

## ○事務局

前のほうにも投影しますが、横置き資料でも用意しておりますので、見やすいほうをご覧ください。

「伊勢志摩地域高等学校活性化を考える会」では、前半に約30分間の説明をさせていただき、その後、お集まりいただいた皆様からご意見をいただく予定にしています。

お伝えする内容としては主に4点あります。中学校卒業生数の今後の推移予測、この地区の高等学校の現況、学校が小規模化していった場合の教育活動について、それから、皆様にやっていただいておりますこの協議会の検討状況です。これらを集まっていた方に聞いていただきご意見をいただきたいと考えています。

まず協議会について簡単に説明する予定です。協議会の目的として、各高校がどのように特色化・魅力化を図るかという視点と、どのような規模、どのような学科構成の高校を配置すべ

きであるかという適正規模・適正配置という視点から協議を進めていることを確認しておきたいと思えます。この協議会からの発案で、近い将来に高校等に進学する小中学生の保護者の皆様にお集まりいただきご意見をいただくことが必要ではないかということから、この「考える会」の開催にいたったことを説明します。

この地域を取り巻く状況として、データ等をわかりやすく説明してご意見をいただきます。これは、中学校卒業生数の今後の推移予測です。三重県全体の減少についてまず示します。見ていただくとわかりますように、平成16年までは2万人台でしたが、その後、平成18年に1万8000人台となり、横ばいの時代が続き、この春には1万2797人、1万2000人台になりました。そこからさらに平成33年、今の小学校4年生が高校生になるとき、1万5000人台になる予測です。

次に、伊勢志摩地域の卒業生数の推移予測を示します。同様の観点でいきますと、平成15年には3000人でしたが、緩やかに減少を続け、この春には2319人と、10年間で約700人減ったこととなります。それから、平成33年までには6年間で500人減り、その後約2年間上昇しますが、その後、一気に200人減り1700人台になると見込まれています。これを合わせてグラフに示すと次のようになります。減少率とさせていただきますが、平成15年の段階を100%と考えますと、三重県全体においては、今の小学校1年生の年度では78%になる。これに伊勢志摩地域の赤いグラフを合わせますと、同様に58%になることが予測されています。

これを伊勢志摩地域の中の郡市別で表したのがこの図になります。小学校4年生の子どもたちが小学校を卒業する平成33年3月には、今年全体で1840人と予測されますので、479人少なくなります。平成27年、この春の卒業生数2319人に対して479人の減少は20.77%となりますので、それを減少率と表したときに、伊勢市、度会郡、鳥羽市、志摩市ではこのような減少率になります。

次に、当地域の高等学校の現況について触れる予定です。まず、赤い点が伊勢志摩地域の県立高校の所在地であることに触れ、私立高校や鳥羽商船高等専門学校等にも言及します。それを募集定員、学級数で表した表として示し、普通科、専門学科、総合学科の特色についても合わせて説明します。

この伊勢志摩地域の現在の県立高校の配置の特色として、各学科がバランスよく配置されていて、中学校卒業生の進路希望にきちんと応えられる状況が整っているという点にも触れたいと思えます。

こちらが、伊勢市から南伊勢町まで各市町別の中学校卒業生が、どこの地域の高校に進学しているかを表したものです。ブルーが伊勢市内への高校の進学者を表しています。グラフの中にある数が実際の人数になります。上のほうにパーセンテージの目盛りがありますが、それを各市町100%見たときに、どれぐらいの割合か見ていただけるようなスケールになっています。ピンクの部分が市内にある全日制高校の進学者の割合を示しています。例えば志摩市をご覧ください。志摩市では、今春に265人が伊勢市内の高校へ進学しました。そのうち、スケールでは大体3割ぐらいになりますが、ピンクの部分の146人が志摩市内にある志摩高校、水産高校へ進学した生徒の数です。黄色の16人が伊勢市でも志摩市でもない伊勢志摩地域の

高校へ進学した生徒です。最後の灰色の21人が、伊勢志摩地域外に進学した生徒です。玉城町は松阪地域に進学する生徒もいますし、大紀町はJR線が松阪沿線ということで、伊勢市よりも松阪市に進学した生徒数が多くなっています。特徴としては、大紀町を除き、半数以上の生徒が、伊勢市内の高校に進学している現状があるということがわかります。

これは伊勢志摩地域の学級数の推移を表にしたものです。平成17年は9校50学級ありましたが、来年3月に入学者選抜をむかえる現中学校3年生は、同じく9校で39学級になっています。500人減少する予測の平成33年度には今のままの割合でいけば、伊勢志摩地域全体で30学級から32学級程度の全体規模になるのではないかと予測されます。そのときどのような学級規模、各学校のあり方が望ましいかという問題提起をしたいと思います。

このような流れで考えますと、中学校卒業生数が大きく減少すれば、地域の高校が今よりも小規模になることが予想されます。その場合の教育活動はどういうものだろうかということをご紹介し、ご意見をいただきたいと考えています。

まず、学校における生徒の活動です。学校が小規模化した場合は、生徒相互の人間関係が深まりやすく、学校は一体となって活動しやすいという側面があります。その一方で、人間関係が固定しやすく、校内だけでは多様な考え方に触れる機会が少なくなりやすい点も考えられます。

次に、学習環境です。生徒一人ひとりに目が届きやすく、きめ細やかな指導が行いやすいという側面がある一方で、教職員の人数が減るため、多様な選択科目を設置しにくいという側面もあります。

次に、部活動です。生徒数や教員数が減るので、設置できる部活動の数が少なくなる可能性がある一方で、一人ひとりが活躍する機会が増えるという面も考えられます。

最後に、教職員の意志疎通、保護者との連携です。学校規模が小さくなれば、当然教職員の意志疎通を図りやすくなると同時に、保護者や地域社会との連携も図りやすくなります。その一方で教員一人当たりの負担が増えやすいことが考えられます。

また、この伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会における我々の検討状況をご紹介します。冒頭に確認しましたように、この協議会では高校の活性化を目的に協議を行っています。各高校の特色化・魅力化と、適正規模・適正配置です。まず、各校の特色化・魅力化について今までいただいた主な意見をご紹介します。地域と連携した体験的な教育活動をすべきであるというご意見。観光や漁業など地域の特色と結びつけて考えるべきであるというご意見。小中学校への出前授業などの取組、自分たちが地域を担っていくという意識を持てるような取組を進めるべきであるというご意見。それから各学校の魅力をもっと地元伝えていくべきであるというご意見。地域の学校間で連携した活動をもっと進めていくべきであるというご意見がありました。

このほかにも、ふるさとを運営していくという意識を持たせるとともに、各地域にも地域の高校を大切に活かすようにかかわるべきであるというご意見をいただいています。具体的にそれを図で表したのが、このスライドです。先ほど、西村先生のお話にもあったような、地域全体が学校、地域の方が先生というような観点です。それを少し具体的に伝わるよう各学校が既にやっけていただいている活動を写真で紹介させていただきます。このスライドは志摩市開催の時のものです。写真の部分は、開催する地域によって、より生徒に関心やつながりがあるよう

な学校のものに差し替えたいと思っています。

左は鳥羽高校の生徒が海女に扮した活動をしている写真ですし、右下は水産高校のアワビの稚貝の植え付けの様子です。上は志摩高校の「あおさスコーン」の商品開発の様子です。右下は水産高校の商品開発の場面です。地域のお年寄りと度会校舎の生徒の交流会の写真を紹介させていただきました。左の写真では、水産高校の生徒たちが魚のさばき方を小学生に教えています。右は、水産高校内にあるダイビングプールを使って水産高校の生徒が小学生に指導しています。地域貢献では、最近、伊勢志摩サミットのカウントダウンボードを志摩高校が制作して話題になりました。こちらは、水産高校のサバイバル缶詰の紹介です。地域の行事では、志摩市の説明会では、志摩高校と水産高校が、それぞれ「ええじゃんかまつり」にブースを出して参加し、清掃活動にも参加した写真です。

地域の課題を見据えた活動では、伊勢高校生を中心とした高校生が医学部セミナーに参加し、紀南病院を訪問したときの写真です。右下は、南伊勢高校南勢校舎での防災マップ作成の写真です。学校が連携した活動では、水産高校生が採った魚を、相可高校の食物調理科に贈呈している様子や、先ほど紹介させていただきました地域防災ボランティアの写真をあげてあります。

最後に、きめ細かく丁寧な指導ということで、志摩高校での学習指導・進路指導の写真を紹介しました。

続きまして、適正規模・適正配置についてです。2つの意見をいただいております。一つは、小規模となっても各地域に高校を残すべきであるという意見です。主な理由として、遠距離通学や下宿は生徒にとって大きな負担となるというご意見。地元から高校がなくなると地域の衰退につながるというご意見を具体的な意見としてあげました。

もう一つは、高校には一定の規模が必要であるという意見です。主な理由として、生徒が切磋琢磨する中で社会性を身につけるべきであるというご意見。学校行事や部活動等を充実させる学校生活を過ごすためには一定の規模が必要であるというご意見です。

最後に、これらの2つの意見をもう一度確認させていただき、お集まりいただいた皆様方のご意見を、質疑応答やアンケートを通じて広くお伺いする予定です。

## ○事務局

開催場所によっては、生徒の写真を、より地元の高校の部活動などの様子をわかってもらいやすいよう写真を入れ替えたりする予定です。

それでは、引き続き18ページをご覧ください。10月26日に志摩市の阿児アリーナで行った「考える会」での意見の概要です。参加者147人でした。他の地域では来年1月中ごろから下旬にかけて開催予定ですので、第2回鳥羽・志摩・度会地域ワーキング会議と、第3回の協議会で全部の意見を集約して、主に協議いただこうと思っています。

本日は、先に開催しました志摩市で出されたご意見をご紹介します、それに基づいたご感想やご意見を交わしていただきたいと思います。

会場での質疑応答では、ご意見をいただける方の数も限られますので、なるべくたくさんの方から意見をいただくために、帰りにアンケートを書かせていただきました。それが23ページです。「特色化・魅力化」、「適正規模・適正配置」、「それ以外のこと」と3つに区切らせていた

だき、意見をいただきました。自由記述式でしたので、実際に出していただいた中で具体的に意見をいただいたのは4割ぐらいでした。そのため、今後開催予定の他の会場においては、もう少しより答えていただきやすいようにアンケートに改善を加えることを検討しています。

志摩市では、120数名分のアンケート回答をいただき、そのうち4割ぐらいに自由記述欄に記入がありました。18ページの略例の通り、各意見の文末に、(幼・保)とか(小・保)というように、お答えいただいた方の所属を示してあります。例えば「地域と深く連携していくことが大切である」という意見に、「中保2」とありますが、中学生の保護者が2人ということです。18ページの下から4つ目の意見は、括弧内に(小・中・保)とありますが、これは小学生と中学生の子どもが2人いる保護者のご意見という意味です。

いただいたご意見を全部読むわけにはいきませんので、主だったご意見を読ませていただいうえで、2～3分各自で黙読いただき、その後、ご意見をいただきたいと思ひます。

まず、上のほうから主だった意見を紹介します。18ページ「地域と密着した活動」で、たくさん意見をいただいたのは、地域と深く連携していくことが大切であるというご意見。3つ目、他の市町では学ぶことができない志摩ならではの学びがある高校をつくるというご意見。地域の学識者が先生となる取組など、新しい教育の仕組みをつくり出すといいというご意見がありました。

その次の「学力や進学指導の向上」というところでは、近くに進学に有利な学校があれば、伊勢まで行く必要はなくなるというご意見。子どもたちが求める学力レベルの学校が伊勢にあるので、どうしても先を考えたら伊勢へ行ってしまふというご意見がありました。

19ページは、小規模校のよさについていくつかまとめた意見がありました。小規模校による手厚い指導のよさを実感している、もっとPRすべきだというご意見。教師と生徒の距離が近いのは小規模な学校ならではのことだと思ふというご意見。各高校が作成しているカラー印刷のパンフレットがわかりやすいので、もっと活用してPRすべきだと思ふというご意見。普通科の魅力をもっとPRしてほしいというご意見がありました。

一方、「適正規模・適正配置」については、先ほどのスライドの中で、この協議会で2つの意見があることを紹介しましたが、アンケートでも、小規模となっても各地域に高校を残すべきであるという趣旨のご意見が36ありました。現在の高校の維持をお願いしたいというご意見。小規模になっても地域に高校を残したほうがよいと思ふというご意見。どんな形であれ、地元には学校は残してほしいというご意見。地元の高校がなくなるのは、地元にとってダメージが大きいと思ふというご意見。通学時間を考慮して小規模校を残してほしいというご意見。人数が少ないから減らすという考え方には賛成できないというご意見。この方は、各高校の学級数を書いてありましたが、このように鳥羽、志摩、南伊勢、水産高校を2学級ずつ置くことで、伊勢市内の高校の学級数が減るといふ書き方をしてであると判断し、こちらのほうに入れました。

高校には一定の規模が必要であるという趣旨のご意見は18件ありました。学力向上のためには適正規模が必要であると思ふというご意見。たくさんの学科があつて子どもたちが選べる環境であつてほしいというご意見。一定規模の学校において多くの人と出会うことは大事なことであるというご意見。ある程度的人数がいることは、学校の機能を果たしていくためには必要だと思ふというご意見。今後の少子化を考えると、統廃合は仕方がない等のご意見があ

りました。

21ページの「その他の意見」というところで、適正規模はやむを得ないが、小規模がよいと選択する人もいるので、すべてを統合せずに一部小規模校を残しておいてもよいのではないかというご意見。統合もあるが小規模校を残しておいてもよいのではないかというご意見。小規模校の存続と一定の規模を持つ学校のバランスをどのように図るかが大切であるというご意見。伊勢市へ進学する生徒が多すぎるように感じたというご意見。志摩市内の高校を減らすのではなく、伊勢の高校と同じ学力の高校を配置するか、南伊勢高校のように校舎制を採るのもよいのではないかという意見もありました。

全体のその他の部分です。少子化の中で、学校だけでなく地域が協力して学校を存続させていかなければならないと思ったというご意見。地元で働くことができる保障があって初めて地域の高校も活性化できるというご意見がありました。

せっかくの機会ですので、もう少し黙読をしていただき、その後、簡単に意見交換をしていただけたらと思います。

### ○松本会長

確認ですが、この意見を読んで、今後の説明会でどうあるべきかや、アンケートの内容についても、修正することはあるのでしょうか。

### ○事務局

その点につきましては、事務局内で検討させていただきたいと思います。アンケートについては、自由記述のみの形式であったためか、参加者の4割程度しかご回答いただけなかったので、原形は大事にしながらも、より答えやすいように工夫する必要があると考えており、検討させていただきたいと思います。

アンケートの回答のまとめ方については、志摩市だけでも4ページ半になっていますので、すべての市町が出そろおうと非常に膨大な量になることが危惧されます。そのため、まとめ方も検討させていただきます。今回は、まだ1カ所しか開催していませんので、このような形でできるだけ多くの意見を出させていただきました。

### ○松本会長

P T Aや地元の強力なお力添えをいただき、この「考える会」が全地域で開催することができることは素晴らしいと思っています。黙読していただき、この「伊勢志摩地域高等学校活性化を考える会」に対してご意見をお願いします。今後開かれていく内容について、方向性などありましたらお願いします。

### ○木下委員

保護者の本音が聞けるこういった機会をつくっていただけてありがとうございます。鳥羽市からは約7割の子どもが伊勢市内に通っている状況なので、「なぜ、あなたは自分のお子さんを鳥羽の高校に行かせなかったのか」や「なぜ、伊勢の高校を選んだのか」という理由をはっきり

聞いてもよい気がします。

#### ○松本会長

今回対象とするのは、現在高校へ通っている子どもを持つ保護者ではないということですね。

#### ○事務局

一部、兄弟・姉妹で通っている可能性はありますが、主には中学生、小学生の保護者なので、これから行かせるつもりがあるのかどうかという視点もあるかと思います。

#### ○片山委員

鳥羽市と南伊勢町においては、地元の高校の校長が学校の紹介や、現在努力して取り組んでいる現状、将来ありたい姿を説明することが必要なのではないですか。よい機会だと思います。

#### ○松本会長

志摩市では校長先生によるパネルディスカッションを行ったということですね。

#### ○事務局

パネルディスカッションについては、志摩市PTA連合会からの要請をいただきました。

#### ○森田委員

志摩市では、先日10月26日に開催しましたが、わずか2時間程度の説明会で、これだけの意見が出たということは評価してよいと思います。志摩高校と鳥羽高校、南伊勢高校、水産高校の校長先生に来ていただき、磯部中学校の舟戸校長先生がコーディネーター役になり、各学校の特色をわかりやすく説明していただきました。各校長先生の今の思いがよく伝わりましたし、舟戸校長がうまく引き出していただいたと思います。会場の中では3～4件ほどしか意見は出ませんでした。このアンケートには、私たちが考えていたような意見は多少なりとは出てきたかと思います。本日、西村先生にお話していただいたような内容も意見の中に結構入ってたりするので余計に感じたのですが、本日の西村先生にお話していただいたような内容を保護者に伝えたら、将来的に保護者の考え方も変わってくるのではないかという気もしました。

年輩の方々の意見も大切だとは思いますが、これからの地域をどうしていくかということについては、若い方の意見、今一番危機感を持っている方の意見はすごく大切だと思います。でも、そういう説明会を開催すると、年輩の方が参加者の多数を占めることが多いので、いかに若い方に参加していただき、いいアイデアを出していただけるかが大切だと思いました。

#### ○松本会長

今回、近い将来、高校生を持つ保護者を中心に参加を募り、まず現状や高校の現状を知っていただき、その上でどうしていったらいいかという意見を吸い上げるところに主眼が置かれて

いるので、またここで講演を織り込むのは時間的な問題があるように思います。可能な限りそういう講演や高校からのアピールを盛り込んでいけるか検討いただければと思います。

### ○西村副学長

2週間ほど前に、鈴鹿中学校で約90分の講演を行ったところ、講演後に10人以上が質問や意見を言いに来てくれました。その中には「地方から世界を変えられますか」とか、「この話を自分たちの中学だけで聞いていいのですか」とかの意見もありました。つまり、中学生でもわかるということです。こういうことを進めるときに、保護者だけでなく、子どもたちの声もきちんとした説明しながら吸い上げていくような機会を設けることは重要だと思います。検討してみてください。

### ○舟戸委員

志摩市において、保護者が集まってこのような課題について考える機会を持つことができたことがまず一番の成果だと思います。実際、ほとんどの保護者は全く関心がないため、チラシを配って参加を呼びかけるだけでは、おそらく多くは集まらないことが予想されました。そのため、どうしたらより多くの保護者に集まってもらえるかを工夫しました。PTAの協力を得て動員をかけて、各学校においてPTAの役員をされている方々を中心に集まっていただきました。アンケートの結果を分析する際には、その点も考慮に入れる必要があるでしょう。まだまだ地域にはたくさんの声があって、それをどうしたら拾えるかを考えていかなければなりません。ここにもあるように小さい学校のよさを知れたことも大きな一つの成果として上がっています。

会場での質問にもあったように、成績が良ければ伊勢の学校へ進学する風潮は保護者の中に根強くあって、その意識をどうやって変えていくかは大切な視点です。出席していただいた高校の校長先生方は、「自分たちの学校でできるだけのこととする」と力強く発言されました。地域の高校で何でもすべてを実現することは難しいかもしれませんが、適正をしっかりと伸ばすことはできると思います。また、そのような価値観が地域や保護者の間に浸透していくにはまだまだ時間がかかるだろうとも思います。西村先生の説明にもあったように、勉強ができる生徒が都会の高校や大学へ進学し、そのまま就職して地元に戻ってこないということが、今もまだ状況としてはあります。そのような状況にどうやって歯止めをかけていけばよいのかという大きな課題をもらった気がします。一回会議を持っただけで何かが変わるわけではありませんが、これから、更にどうしていけばよいのだろうかという気持ちが強くなったのも確かです。

### ○松本会長

そろそろ終了予定の時刻ですが、今後の説明会をより充実したものになるように、できるだけ多くのご意見をいただきたいと思います。

### ○斎藤委員



志摩市で開催した「考える会」の様子を聞かせていただいて、少しイメージがわきました。中身について、それぞれの市のPTA連合会と事前の話し合いをしっかりといただき、保護者の皆様は、どのようなことを話し合いたいのか、どのようなことが知りたいのかというニーズをつかんで開催してほしいと思います。志摩市では、鳥羽・志摩・度会地域の県立高校の校長先生に来ていただきパネルディスカッションを行っていますが、鳥羽市開催の予定では鳥羽高校の活動報告だけとなっています。現実的に鳥羽高校への進学が非常に少なく、伊勢市内へ多くの生徒が進学している実態の中で、学校紹介にあたる内容が、鳥羽高校一つでいいのかと感じます。今この地域の各高校が取り組んでいただいていることをしっかり知っていただくための何らかの手立てが必要なのではないでしょうか。

### ○松本会長

プレゼンの中にも、十分な時間ではありませんでしたが、いくつかの写真を使って、この地域の各高校がどういう取組をなされているかという内容はありました。やはり各高校での取組などをコンパクトにまとめて情報提供できるような機会または資料が毎回あるとよいかもかもしれません。

### ○清水委員

私は教育関係ではなく産業界から参加させていただいています。グローバルな大学は数校でよく、あとは、地方大学も含めてすべて職業型の大学でいいのではないかという、過激な発言をする経済人がいます。そのような中で、三重県における高校の特色化の観点としては、多様な人材を育成することが一番大切ではないかと思います。多様な人材を育成することが高校の魅力化になる可能性もあります。また、この三重県に多様な人材を受け入れる土壌があるのかも気になります。

つい最近、三重県で「産業教育フェア」が開催されましたが、文部科学省と経済産業省ではお互いに人事交流をしているのですが、人材育成については、それぞれの文化からくる違いがあるようです。文部科学省は、普通科高校を中心とした考え方があるらしいのですが、経済産業省は職業高校の人材育成のところに期待感を持ち焦点をあてていて、それを底上げしようとしています。三重県知事が幸福度追求について述べた際に、「都会ではなく地方」とか、「集団ではなく個人」というテーマを掲げ、多様性のある社会システム構築について触れていました。三重県南部でこのような考えに則った教育や雇用をつくる方向性があるのかということを保護者や生徒にも示したうえで、多様性のある人材をつくるのが大事ではないかと感じました。

例えば、三重大学や鈴鹿高専・鳥羽商専には、職業高校からの多様な人材を受け入れる実績があるのでしょうか。また、三重県南部がそのような人材を輩出できるとするならば、おそらく首都圏とか都市部の大学も欲するだろうと思います。三重県全体でそういうシステムをつくっていくとよいのではないかと思います。

### ○松本会長

三重大学は専門学科高校出身者向けの推薦入試制度をもっています。工業高校と商業高校な

どから、約20名受け入れています。私が専門とする技術教育分野では、受験生が1人と少ないのが現状です。高等学校であまり教えられておらず、「ものづくり」に対する生徒たちの関心が低い表れであると感じています。

もう一つ、三重大学では現在「COC（センター・オブ・コミュニティ）プラス」の認定を受け、県も連携し、南部地域活性化に参画しています。今後、各地域からの三重大学への進学者を増やしていこうという話もあります。各地域に大学が提供するだけではなく、各地域から大学に要望を出してもらって主体性がある成り立っていく仕組みだと思います。大学の一方的な思いだけで地方創生ができるわけではなく、地元の声を聞きながら、大学として何ができるのかを考え提案し、合意を得たうえで取り組むことが大事だと思います。

今回、「考える会」でアンケートを取りますが、保護者の意見を集約したから答えが出るのではなく、こんな子どもたちを育てたいという地域からの提案があって、保護者の賛同をえられるものをつくり出していかなければいけないと思います。それは高校だけでも、また、地域だけでもできるものではありません。理想的な将来のあり方や地域のニーズと先生方の思いなどを集約して、モデルを提案したときに、はじめて保護者たちは自分の子どもをそこに通わせたい、また、子どもたちもそういう高校で学びたいという気持が生まれるのではないかと思います。この協議会においては、そのような視点を忘れずに、いかに地元と高校を結びつけるような提案ができるかが大切だと思います。

## ○池田委員

西村先生に質問ですが、本日、西村先生が講演された方向性が、知事が推し進める三重県南部地域の活性化の方向と同じであると理解してよろしいのでしょうか。つまり、今後、教育委員会も含めて、このような方向に進むと理解させてもらっているのかというのが一つ目の質問です。

もう一つは、多様性についてですが、私も10年以上前に宇治山田高校に勤務していました。そのころは昔の宇治山田高校の雰囲気も少し残っていたような気がします。宇治山田高校には結構変わった人間も平気で共存できるような雰囲気があり、それが魅力だったと思うのですが、その点について意見をいただけませんか。

## ○西村副学長

県の三重県南部活性化の施策が、私の考えに完全に合致しているかどうかは言いかねます。ただ、私は知事に対しては常にこの話ばかりしていますので、かなり理解してもらっているという自負はあります。私は、三重県南部活性化事業を中心に請け負って、三重大学と県が一体となって農業を中心とした地域おこしを推進しています。その場に大学生たちも入れて、本日お話したような方向性で進めています。

先ほどの「COCプラス」の話にもあったように、三重大学はこれから三重県全体を研究教育フィールドにしていきます。その一環として、三重大学のサテライト校をつくる予定です。来年、伊勢志摩サテライト校と東紀州サテライト校をつくります。これらの場でどのような教育に取り組むのかは、逆に地域の皆様と話し合う中で、大学の考えをより現実的なものに修正

していく必要があります。例えば、その中で高大連携をして、将来の地域リーダーをつくるような教育ができるといいと希望しています。私は社会連携を担当する副学長ですので、私自身もそれらに参画していくつもりでやっていきたいと思います。

多様性に関しては、もともと地域にはさまざまな環境で育ってきたさまざまな方々がたくさんいるので、それぞれが持つ個性を自由にさせてあげるほうがいいと思います。私は今50歳です。同期のいろいろな人物が50歳ぐらいになってきて、社会において誰がどのように強くなったのかが経験上ある程度見えています。その中でも宇治山田高校のメンバーの成功確率が高いような気がしています。当時は、この地域では自営業が多かったこと、先ほどお話ししたような小さい頃から自分の力で生きるような雰囲気が地域全体にあったからではないかと感じています。それを生かすような当時の宇治山田高校の教育がよかったのではないかと思います。

### ○松本会長

時間が超過してしまいましたが、本日はたくさんのご意見をいただきました。今後、地域の保護者あるいは地域の方を対象に説明会を開き、次回協議会においては、その意見集約結果をもとにして、来年度へ向けた話し合いにつなげていきたいと思っています。

それでは、ここで進行を事務局に返します。

### ○事務局

皆様、長時間にわたりご協議いただきありがとうございました。最後に、宮路教育政策課長からご挨拶申し上げます。

### ○宮路教育政策課長

皆様、長時間のご協議、ありがとうございました。西村先生、本日はありがとうございました。今までとは違った視点でご意見をいただけたと思います。時間が少し足りませんでした。本日の内容を踏まえながら協議していければと思います。

今後、本日、お知らせした日程で各市町での説明会を進めていきたいと考えています。それを受けまして、2月中旬ぐらいに3回目の協議会を開かせていただいて、「考える会」全体を報告させていただきながら、ご意見をいただきたいと思っています。

市町での「考える会」の開催にあたりましては、保護者以外の地域の方や行政の方も含めてご案内できる方法を、各市町教育委員会と相談させていただきながら進めたいと思っていますので、その節はよろしく願います。本日はありがとうございました。

### ○事務局

旅費にかかる書類提出がまだの場合は、ご捺印いただき係までお渡しください。

次回協議会日程につきましては、改めて日程調整をさせていただきます。

本日も長時間にわたりご協議をありがとうございました。これをもちまして、第2回の協議会を閉会します。気をつけてお帰りください。ありがとうございました。